あつて、各れも British Institut of International Affairs の發刊になるものである。

本著は、多く公文書を基礎とし、その叙述充分に詳細にして、しかも讀者をして根本事情を曖昧ならしむる程複雜ならず、よくその中庸を得、公平を旨として全く黨派的國民的感情より超越して居る。しかも著者は、史學の造詣深き上に、文學的才能に勝れ、外交、旅行に多大の實際的經驗を有する人なれば、本著が甚だ優秀なるものである事は言をまたない。

前著に於て著者は、國際關係の見地に立つて、一九一四年と一九二〇年との世界を比較して居る。即ち、大戰前に於ては、經濟上軍事上、歐洲が國際關係の中心であつたが、大戰による疲弊は、歐洲列强の "hegemony of concert" を破壞せしめ、歐洲は半ば放棄され大陸となつてしまつたこの悲觀的結論を與へて居る。

後著に於ては、前著に於る結論を適用して最近の國際關係を論述して居る。國際聯盟會議の如き、最近生れ出た國際的權威に關して略述した後、世界を、西歐、東歐回教世界、熱帶アフリカ、極東及太平洋の五部に分ち、この區分に從つて、最近の國際事情を叙述して居る。完全なるビブリオグラヒーを附し、重要なる條約、豐富なる地圖の附加と相まつて、讀者の了解を容易ならしめて居る。要するに本著は、最近國際關係史に於る模範的良著なりとすべく、しかも今後、毎年續刊さるゝ豫定である事は、吾人の大なる喜悅を感ずる所である。〔以上大村〕

歐米觀察過去より現代へ

文學博士　三浦　周行著

本書は著者三浦博士の歐米見聞記であつて、博士は大正十一年の春より年の暮にかけて、大戰後、動搖の尙ほ熄まぬ歐米の地を巡りて、其專門の史學の立場より、彼地の歷史學研究、諸種敎化機關、其他國家社會の奧底に潛流してゐる戰後の氣運を觀察し、歸來後筆を執り、一部、雜誌に發表したものをも合せ篇したものこれである。一年に滿たざる巡遊とは言へ、諸種の方面に觀察を向け而も一般旅行記の類と其趣を異にするのは、博士の學問

と其より觀たる問題がこゝに取扱はれてゐる爲めである。

予は獨逸にあつて博士が英國より海を渡り、和蘭を經て來られるのを伯林驛頭にお迎へしたことがある。當時獨逸にあつては、外國人は其入國と居住について煩累に堪えぬ手續を必要としたが、其間にあつても旅の疲を休むる暇もなく、寸隙を惜んで、其地の大學、古文書館、並に地方圖書館を驅け廻はれる博士の熱心と精勵ぶりには大に驚いた。歐人は往々敏捷なる巡歷者を評して亞米利加人の如しと云ふが俊敏に於て敢て讓らない日本人の內にても、博士は短日月を最も有効に用ひて、史學教室博物館、史蹟を巡歷し、斯學の大家新進研究者と會談し設備、研究方法乃至學問の趨勢をも調査し、聽取もされたので、其異常なる活動の結果と收獲とは本書の到る處に見ることが出來る。

本書收むる篇目は、歐米の史風、史學研究室、古文書館、博物館、史蹟遺物保存、學會、夏期講演、大學教授學生生活、其他ムツソリーニ氏と語る、スパイ、書肆、國民的信仰等の十數篇より成つてゐる。其內には歐米に於ける戰後史學の盛衰、文化史經濟史研究に對する風評或は史學研究室に於ける學生指導の實際、古文書記錄保存方法、各地古文書館博物館に於ける日本史料の歷訪、米獨史學大家の風貌等の記事があり、學窓を離れては天下風雲兒ムツソリーニの面目、戰後銳敏となれる國際警察、軍事探偵等興味ある話題を有つてゐる。

これを讀むに、博士が我國史學を代表してゐる東京帝國大學史料編纂掛、京都帝國大學國史研究室にあつて多年史學研究に沒頭さるゝ傍其設備と方法の爲めに苦慮碎心された後、一たび出でゝ歐米史學の諸中心を巡遊し親しく受けた感銘を記錄されたのが本書であるだけに、其素地既に他と異り其印象の淸新なものがあるを窺ひ得るのであつて本書が一般旅行記と異り、又平板な案內記と同一に見ることの出來ぬ所以もこゝにある。從つて讀者は最近史學の組織的な記述や論辯を聞くよりも寧ろ此書によつて著者を通じて泰西現時の史學の鮮明な印象と社會のグリンプスを得ることが出來るであらう。本書挿入

の幾多の諸國風物、著者採訪の諸史料の寫眞亦珍らしく歐米會遊の人にも未見の人にとつても、興味ある讀物である。(四六版五〇〇頁、內外出版株式會社發行、價三、八〇)〔西田〕

◎漢式鏡　後藤守一著

題目の著が日本考古學大系の第一卷として刊行せられた。先史、原史、有史の各時代に亘つて各期更らに數卷の遺物を編述するものゝ第一歩として今ま漢式鏡の編著を見るものであるが、本冊は菊版九百餘頁に收むるに第一、第二の兩編とし、前者には漢式鏡に對する解說として更らに十一項に分ち我が國に於ける漢式鏡の研究、漢式鏡發見史、部分名及び文樣の區別、型式の分類、年代の考定、本邦內地に於ける漢式鏡發見地名表、內地發掘漢式鏡各說、支那鏡の概述、朝鮮發掘の古鏡、日本內地發掘漢式鏡の文化史的研究等であつて後者は漢式鏡關係論文の摘述である。以上の說明を助くるに約七百の挿圖を以てされてゐる。

此種の試みは斯學に志すものゝ最も必要とするものであつて本冊は卽ち漢式鏡に對する凡てを網羅せる資料編とすべく、近時、漢式鏡に對する研究の益々其の微に入るに當り本冊の刊行さるゝを見るは最も時機に適したるものと云ふべく、編者の忠實なる資料摘要は斯學者の好適なる備忘錄に外ならない。(東京市神田區今川小路、雄山閣發行、定價九圓)

◎樂浪郡時代の遺蹟(圖版)　朝鮮總督府藏版

古蹟調査特別報告第四冊として題名の圖版上下兩冊が刊行せられた。本冊の包括する遺物の主要なるものは大正五年、關野貞博士、谷井濟一氏等によつて學術的發掘のあつた北鮮大同江畔の有數なる古墳墓數基の遺物と同附近出土の重要なる遺物とを網羅さるゝものであつて、就中、大同江面第九號墳の出土遺品の如きは驚異すべきものがある。爾來、遺物の一部分に就ては時々引證さるゝものあつて、其の綜合的發表を期待すること切實であ